

JAIBS 第 31 回年次大会

統一論題「激変する国際ビジネス環境の中の日本企業を考える」

タイトル：分断された世界における国際経営の再構築

氏名：長谷川信次 所属：早稲田大学

キーワード（5つ以内）

Managing Across Borders、サステナビリティ課題、ローカル SDGs、テロワール、地理的表示

要旨（300 字程度）

今日、地政学リスクの高まりや相次ぐ感染症、反グローバリゼーションの動きなど、世界を分断する要因が数多く存在する。しかし、国際経営の本質は「ボーダー（境界）をまたいで経営する」ことにある。歴史を振り返れば、分断を生む境界は絶えず存在し、それらを越えていかに経営するかで、企業の真価が問われてきた。今日の新たな分断も、適切に対応することで企業にとってあらたな競争優位の源泉となり、企業間のポジショニングに地殻変動をもたらす可能性がある。

世界中で取り組みが進む持続的開発もまた、分断を形成する一つの要因である。企業は、各国あるいはグローバル社会が抱えるサステナビリティ課題への取り組みを、自社の私的利益追求と相反しないようにしながら強化する必要がある。他方、さまざまなサステナビリティ課題は実行手段を介して相互に関連しており、異なる業種や国の間にスピルオーバーも生じる。そうした相互作用の複雑なシステムにおいて、要素間のシナジーに着目することがサステナビリティ経営の鍵を握るであろう。

本報告では、地域固有の資源を活用して循環経済を構築し、サステナビリティ課題や地域開発に取り組もうとするローカル SDGs、とりわけ「テロワール」に注目し、課題間の相互関連と企業グローバリゼーションとの関係を探る。日欧間の比較調査の知見に基づき、国際経営の再構築に向けた新たな指針の導出を試みる。

JAIBS 第 31 回 年次大会

タイトル

「グローバリゼーションを襲う嵐—日本企業の対応は?」

報告者: 安室 憲一 所属: 兵庫県立大学大学院 客員教授

キーワード: 戦略的過剰生産、関税競争、サプライチェーンの危機、新しい産業集積、
デリスキング

要旨:

①中国の「戦略的過剰生産」の破壊力

中国は国内消費の過少と国有企業を中心とする過大な生産力の捌け口として輸出に注力する。とくに「新質生産力」(EV、電池、太陽光パネル、風力発電ほか)の世界市場を狙って国家戦略として輸出を推進している。

②関税戦争

その結果、先進各国を中心に中国製の先端製品(特に EV)に対する関税障壁が設けられる。中国はそれに対する報復関税を用意し、世界は WTO 以前に戻ってしまう。こうして「無制限」のグローバリゼーション時代は終わり、戦前の関税競争に逆戻りする。

③サプライチェーンの危機

米国は北米経済圏に引きこもり、世界の警官としての役割から後退する。その結果、中東やアフリカ、中央アジアにおける治安が不安定化し、たびたび輸送船がゲリラに襲撃され、海上輸送が不安定化する。その上、燃料の水素転換により運賃が高騰する。地政学的リスクの高まりとともに、グローバルなサプライチェーンが危機に瀕する。

④新しい産業集積の形成

サプライチェーンを最短にし、地政学的リスクから守るために、企業は新しい産業集積を形成し始める。20 世紀には製鉄を中核に産業集積が作られたが、今度は半導体を中心にハードとソフトの会社が結集する。九州に TSMC を中心にソニーやトヨタ(EV)が集まり、それらを中心にさらに産業が集積する。この集積内では流通は最短、ジャスト・イン・タイム、情報漏洩も最小限に抑えられる。

⑤デリスキングと業際化

この産業集積は「多国籍」であるが、同時に地方の中小企業も重要なパートナーである。こういう「魚の群れ」が国境を越えて幾つか横に連なって新しい「群れ」を創る。こうして巨大な捕食魚から身を守る、という構想である。戦略的余剰生産を狙う巨大魚に対する「小魚」の知恵である。とくに情報漏洩のデリスキングには「地場」への囲い込みが効果的である。

JAIBS 第 31 回年次大会

統一論題「激変する国際ビジネス環境の中の日本企業を考える」

タイトル：あらゆる価値の循環、非連続成長に向けたメルカリの取組み

氏名：永沢岳志

所属：メルカリ（執行役員 CGO 兼 CEO Fintech 兼 株式会社メルペイ CEO）

趣旨：

メルカリは「あらゆる価値を循環させ、あらゆる人の可能性を広げる」をミッションに掲げ、フリマアプリ「メルカリ」などの Marketplace 事業およびスマホ決済サービス「メルペイ」などの Fintech 事業を展開しています。同社における、非連続な事業成長を実現するためのポジショニング、それを実行する組織運営について紹介する

JAIBS 第 31 回年次大会

統一論題「激変する国際ビジネス環境の中の日本企業を考える」

タイトル 台湾 I T 産業の急成長と日本企業にとってのビジネスチャンス

氏名：吉村 章

所属：Taipei Computer Association (TCA) 東京事務所 駐日代表

キーワード（5 つ以内）

台湾半導体

台湾 IT ベンダーの多角的全方位戦略

台湾人経営者

台湾の企業文化

スタートアップ

要旨

tsmc や psmc など台湾半導体ベンダーが注目を集めています。「世界の工場」と言われた時代から台湾は如何にして現在のポジションを築いてきたのか。COMPUTEX & InnoVEX に見る台湾 IT ベンダーの変遷からその背景を解説します。キーワードは台湾大手 IT ベンダーの「多角的全方位戦略」、そして必ずしも IPO を目指さない独自のエコシステムを作り出してきた台湾スタートアップ。さらに、台湾人経営者のマインドや独自の企業文化を育んできた水平分業体制など、台湾 I T 産業の急成長とその背景に迫り、また日本企業にとってのビジネスチャンスを考えます。

JAIBS 第 31 回年次大会

統一論題「激変する国際ビジネス環境の中の日本企業を考える」

タイトル：電池産業から見た現在の日本の競争力の立ち位置

氏名 氷川 広

所属 積水化学（新事業開発部 電池事業創出グループ長）

要旨：近年、国際的な競争激化に中にあるリチウム電池産業の最新現況と発表者の 20 年以上にわたる電池産業への経験から示唆する日本の電池産業の立ち位置と、今後の方向性に関する意見。

JAIBS 第 31 回年次大会：2024 年 11 月 9 日（土）阪南大学

統一論題「激変する国際ビジネス環境の中の日本企業を考える」

【JAIBS 創立 30 周年企画】

記念講演：「国際ビジネス研究学会の回顧をこれからに」

大東和 武司（関東学院大学）

年次大会実行委員会から学会創立 30 周年企画の記念講演として、この 30 年間を振り返って、現在・未来へと繋がる講演をしていただきたいとの依頼を受けた。いささか荷の重すぎる大役ではあるが、学会設立時に一般会員であったものとして、何とかわたくしなりの役目を果たすことができればと考えている。

国際ビジネス研究学会（JAIBS）の回顧ではあるが、1972 年に研究会が組織化された多国籍企業研究の流れを避けては通れない。同研究組織化の数年後に院生となり、その研究熱量の高まりを感じていた。これは日本企業の多国籍化の進展、さらには企業の国際経営の深まりにほぼ連動しているが、こうした JAIBS 前史にもふれながら、回顧し、これからへにつながる話ができればいいなと思っている。